

“理論物理の父”訪日

四月、西独のハイゼンベルグ博士



西ドイツのマツ

クス、ブラック物理学研究所長ウェルター・ハイゼンベルグ博士と交友が、四月中旬、日本学術振興会、仁科記念財団の招きで来日することになった。博士は約一月間滞在し、全国各大学の物理学者と討論する。

同博覧は、一九一五年に自ら開拓したマトリックス力学とシュレーディンガーの波動力学を合わせて、いまの量子力学の基礎体系を作りあげ、一九三二年ノーベル賞を受賞した。

ライプチヒ大学で世話になった湯川秀樹、朝永振一郎、藤岡由夫、菊池正志各博士らが、五年ほど前から日本に招きこんで運動していたが、日本学術振興会の招待で博士が抱いていたことが実現した。

博士は四月十六日、夫人同伴で来日するが、物質観、宇宙観などへの関心が盛っているときだった。昭和三十九年の故アインシュタイン博士と同じように素粒子論ブームを起すこととみられている。

1967. 3. 18 湖南新刊

現代思想家の
すぐれた一人



ハイゼンベルク教授

今回ふたたび日本を訪じたワ
エルナー・ハイゼンベルク教授
は、まれに見聞の捷い大学者で
ある。千九百二十五年に量子力学
を提唱し以来、物性論と素粒子
学であると同時に思想家でもある

その名はよく知られていて、いかにたとへばドイツに比べて、千九百五十年代以後の彼は、素粒子の統一理論の建設という大きな仕事を成したとまではいえない。幸中の大きな幸であったといわねばならぬ。

素粒子の統一理論の建設へ

千九百五十年代以後の彼は、素粒子の統一理論の建設という大きな仕事を成したとまではいえない。幸中の大きな幸であったといわねばならぬ。

量子力学から素粒子論へ

ハイゼンベルク教授を迎えて



湯川秀樹博士

論の両方にわたる現代物理学のい
ろいろな分野に、数多くの重要な
貢献をしてきた。初期の業績で最
も有名なのは不確定性原理の発見
であるが、それは量子力学の解釈
と関係し、自然現象の非決定性を
明らかにしたもので、物理学だけ
でなく、哲学思想にも深刻に影響
してもうけており、若いころから

日本人学者たちも多く留学

電化学に關する研究も、出發點はここにあつたといつてよい。私は最近の二十年以上の間、素粒子の時空記述に凝つているのも、もとをたせば、この論文によつてあきらかにされた波動場の量子論の発散の困難を解決したいという一念に發している。

千九百三十二年に中性子が発見されるやうハイゼンベルクは陽子の統一理論を考へた。それは成り立たなくなつたのである。素粒子千鈞一髮、層基

このように現在のところ、素粒子の統一理論を目ざして進んでゆく道は、それら大がかりに対立しているように見えるが、恐らくやがて相互の共通性があるかになり、統一理論の再統一へと進むのではないかと思ふ。

それはともかくとして、四十年以上の長い年月の間、常に物理學

本能的な何ものかを想定せざるを得ない。その一つは坂田昌一博士の陽子・中性子・ラムダ粒子三組を基本粒子とする複合模型を以て出発点とする大きな流れである。その外、紆(う)余曲折がある。今日では、それは高度の数に上つた抽象化・一般化の道を行くものと進みつつある。現在の素粒子論研究者の大多數とくは古的研究者のほとんど全部が、この種の研究にたずさわっている。その中にも抽象化の程度の差による相違が見出されるが、そのいずれにも共通するのは、この段階で最終的なものと考へていない点であつた。

これに対してハイゼンベルクは「物理物質なるものを想定し、それに

の本道を開拓し続け、いまなお意氣衰えぬハイゼンベルク教授に接するのは、物理学を志す日本の若い研究者や大学生諸君にとつても、意義深いことであらう。

来日中のハイゼンベルク教授夫妻は名古屋から端を発して二十八日京都都入る。同教授は約十日、關西下に滞在、各地を観光、京都大阪で講演をなさう。関西におけるおもな日程のきとのとおり。

二十九日京都都観光三十日奈良観光又五月一日京都都観光又二日三日本学館物理学研究所で講演および研究又四日午後二時京大法学部教室で公開講演会(演題 The Role of Modern Physics with the Ancient Human Thinking)又六日阪大で講演又七日京大。